

特集1

# 誇れる宝は まちの中に

万田坑が「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産の一つとして目指している世界遺産登録。世界遺産への取り組みは、ついに大詰めを迎えます。世界遺産登録のための推薦書提出と合わせ、日本の近代化を支えた三池炭鉱の遺産の持つ価値をより強く裏付けるため、この春、万田坑周辺と三池炭鉱専用鉄道敷跡などが国の史跡として追加指定されます。

史跡の範囲が広がることで、炭鉱のまちとしての魅力は一層高まります。重要度を増す産業遺産の価値をよく知り、地域の人や行政をはじめ私たち市民が連携して、一体的に保存活用していく必要があります。

世界遺産の構成資産を目指す万田坑は、世界に誇るふさわしい広がり具备えます。広がる史跡を通して、三池炭鉱の価値を改めて考えます。

世界遺産本登録を目指す  
推薦書を提出

本市の万田坑を含む「九州・山口の近代化産業遺産群」がユネスコの世界文化遺産の暫定一覧表に掲載されたのは、平成21年のことです。

それから約4年が過ぎ、この春、構成資産を持つ自治体で作る「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会（以下「協議会」）は遺産群の世界文化遺産本登録を目指し、国に推薦書を提出します。

日本の近代化を支えた  
複数の資産を一つの遺産へ

九州・山口の近代化産業遺産群は、8県11市にまたがる28の資産で構成する、産業活動に関わる遺産の集合体です。日本が19世紀末から約50年という短期間で近代化し、経済的な発展を成し遂げる礎となりました。日本の近代化は西洋諸国から技術や知識、機械などを積極的に導入し、日本独自の技術に置き換え、試行錯

誤を繰り返しながら成し遂げたものです。

九州・山口の近代化産業遺産群は、それぞれで貴重な遺産を一つにまとめることで、日本独自のものづくりの文化や、世界的にも極めてまれな日本の飛躍的な発展の過程などを顕著に伝えることができる珍しい事例です。このことから、広範囲に存在する複数の資産を一つの遺産とする「シリアルノミネーション」という方法で世界遺産登録を目指しています。

構成資産には、当時の主力エネルギーである石炭を産出した炭鉱関連施設が6つ含まれています。中でも三池炭鉱は、良質な石炭を産出したことで日本での軽工業から重工業への転換と、西洋諸国に船舶用燃料を供給したことで東アジアの海運を支えました。

本市の万田坑は、三池炭鉱の主力坑として優れた技術を伝え、採掘・揚炭・選炭・運炭というシステムが残っている貴重な遺産として、重要な資産の一つと位置付けられています。





今なお現役で稼働している遺産・三池港



第一竪坑関連施設跡が地下に残るアソニツト施設跡



専用鉄道敷きと原万田駅プラットホーム跡

# 世界遺産を目指し、三池炭鉱の遺産を再評価 国指定史跡範囲が拡大

世界遺産本登録に向けた推薦書を提出するに当たり、三池炭鉱施設のある本市と大牟田市では、史跡の追加指定が行われることになりました。坑口と港をつなぐ三井三池炭鉱専用鉄道敷跡や、万田坑の側に残る第一竪坑関連施設跡などが、この3月新たに史跡に指定されます。

明治6(1873)年に官営となり、明治22年に三井組に払い下げられた三池炭鉱は、平成9(1997)年に閉山し、その翌年、万田坑と大牟田市の宮原坑の主要施設がセットで国の重要文化財に、平成12(2000)年には国の史跡に指定され、重要な産業遺産と認識されてきました。

システム―複数の坑口から掘り出した石炭を、専用鉄道で三池港まで運んで集積し、輸出する過程が分かる施設も一体的に保存することが、世界遺産登録に向けて重要な条件であるとなりました。

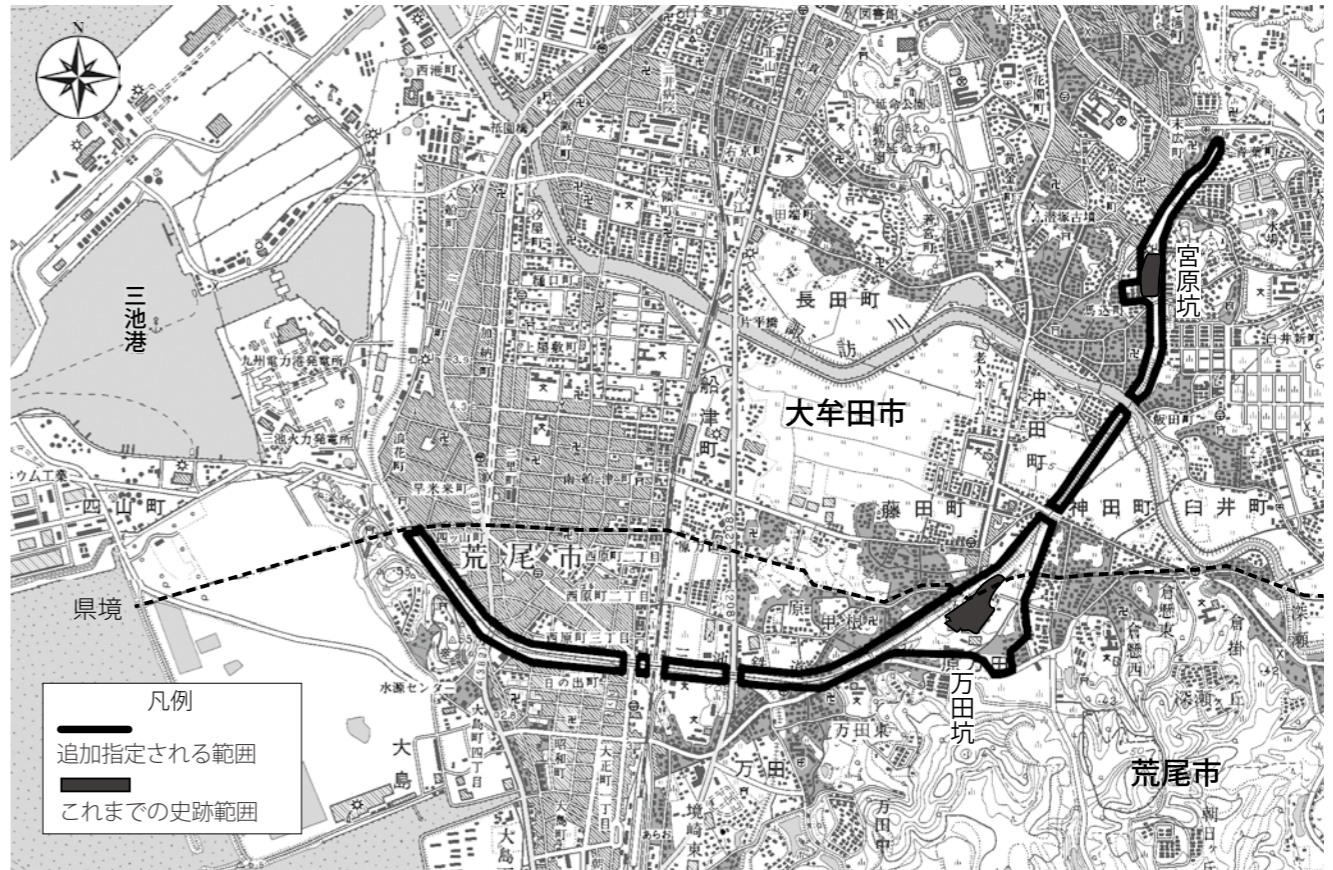
これを受け、本市で調査を行った結果、専用鉄道敷の全長9.3キロのうち約5キロと、第一竪坑関連施設跡(アソニツト施設跡)、沈殿池や給水池跡などの関連施設約5万平方メートルが史跡に追加指定されることになりました。

本市の史跡の広さは、これまでのおよそ2万平方メートルから、およそ11万平方メートルに広がります。

今回の追加指定は、三池炭鉱と発展した荒尾・大牟田という地域が、産業史の上で大変重要であるということを示しています。

## これまでの史跡の範囲と追加指定された範囲

「三井三池炭鉱跡 宮原坑跡 万田坑跡」(国指定史跡)は、新たに追加指定される範囲を含めて、「三井三池炭鉱跡 宮原坑跡 万田坑跡 専用鉄道敷跡」と名前を変えます。



## 地域の遺産から世界の遺産を目指して 宝の真価はまちごと

専用鉄道敷きなどが国の史跡として追加指定されたことで、遺産と遺産が線でつながり、面が一層広がりました。そのことで、荒尾と大牟田―三池炭鉱のあるまちの歴史と価値を、立体的に伝えることができるようになりました。

三井三池炭鉱跡は、日本の近代化への歩み、採炭技術の進歩、そして地底から未来を切り開こうとしてきた人々の営みという歴史を、目に見える形で伝える重要な産業遺産です。

今も残っている炭鉱の遺物は、このまちに住む私たちにとっては当たり前で、見落としがちなものです。しかし、世界遺産登録を目指すという視点から見ると、多くの人が目を見張る万田坑や宮原坑の櫓の威容だけでなく、暮らしの中に溶

け込んでいる風景も貴重な「炭鉱景観」であり、価値あるものでした。

三池炭鉱は、荒尾・大牟田のまちの形成に深く根ざしています。身近にあるからこそ見えにくかった三池炭鉱が残した景観は、世界遺産への取り組みを通じてさまざまな人の目に触れ、徐々に三池炭鉱と私たちのまちの価値を明らかにしてきました。

三池炭鉱閉山から16年、荒尾・大牟田は、かつての炭鉱のまちという姿を少しずつ変えつつあります。しかしまちのあちこちに、炭鉱のまちの姿は残り、歴史を今に伝えています。

日本の近代化を語る大切な地域の宝が、世界の宝となる日―それはまちと私たちの営みが、世界の宝になる日でもあります。

荒尾市の高台から万田坑、宮原坑を臨む。2つの坑口は、今も専用鉄道敷跡でつながっている。

